四

柳次郎は北割下水を挟んで不知火屋敷の前に商いする菅笠屋、才次の家を承知していた。

磐音は、菅笠屋、いわば職人の家というから、長屋に毛の生えた程度かと思っていた。だが、どうしてどうして小さいながらも二階家の堂々とした構えだった。

柳次郎の案内で路地を裏へと回ると、戸口がわずかに開いていた。

台所の板の間には、地蔵の家から蕎麦の丼と握り飯が届けられたところだった。

親方の才次の一家は二階に逼塞して、階下の広い仕事場、居間、台所は木下一郎太や地蔵の親分の田崎たちで占拠されている。

「ちょうどいいところに戻られました。まずは腹をつくってくだせえ」

地蔵の竹蔵が磐音に言いかけ、磐音が品川柳次郎を紹介しようとすると、

「おや、坂崎様は柳次郎さんのお仲間でしたか」

と竹蔵が先に言った。

「地蔵之親分の縄張り内だものな」

さすがに貧乏御家人の次男坊はあちらこちらに顔が広い。

「坂崎さん、北割下水の御家人の小倅は、地蔵の親分には頭が上がらないんです。さんざ悪さをしてきましたからね」

「まあ、柳次郎さんはよかったよ。伝馬町の牢に入らずに育たれたんだ」

「まあね、遠島になった仲間もいますし、命を落とした者もいる」

柳次郎が苦笑いした。

「そんな男です」

磐音が一郎太に紹介した。

「北割下水の御家人に負けず劣らず、うちも三十俵二人扶持ですからね、苦労は分かりますよ」

一郎太がさらりと言うと、

「まずは腹拵えだ」

とまだ湯気の立つ花巻そばの丼を抱えた。

磐音はそばの丼を持って辺りを見回した。

仕事場の板の間には地蔵の親分の手先たちがいて、薄く開けられた戸の隙間から対岸の不知火屋敷を覗いている。

仕事場にはいろいろなかたちの菅笠が積んであった。

菅笠といっても材料が菅で作られるものばかりとは限らない。

檜、竹の子、藤、藺草、それに菅といろいろあり、作り方によって、網代笠、編笠、塗笠、葛籠笠と分かれ、形によって、一文字笠、三度笠、貝尻笠、ハツ折り笠、天蓋とあった。

そんな職人の親方を菅笠師と呼ぶらしい。

才次親方にも通いの職人人たちが何人もいるという。

仕事場の佇まいに目をやりながら、磐音は蕎麦をかてに握り飯を食し終えた。

ふいに裏戸が開き、同心、小者を従えた笹塚孫一が入ってきた。

「笹塚様直々のお出張りにございますか」

一郎太が声をかけた。

「ちと気になることがあってな」

笹塚はどこかに立ち寄ってきた様子で羽織袴をきちんと着けていた。だが、なにしろ五尺そこそこの小軀に大牙したときている。世辞にも風采が上ったとは言えなかった。

台所の板の間に一郎太ら同心、地蔵の親分、磐音と柳次郎が控えた。

「現伯と一緒に拐かされておる見習い医師の堤悠太郎じゃが、こやつも長崎に留学した経験があるそうな」

「それは存じませんでした」

一郎太が言い、竹蔵が、

「笹塚様、堤は今から五年も前に現伯のところに姿を見せて、いきなり弟子たちの頭分に座った男なんでございますよ」

と笹塚に説明した。

「となると竹蔵、それまで番頭株だった者たちが不満を抱いたであろう」

「へえ、それまでは見習い医師の井尻亀清が番頭格でした。こいつと他に二人ばかりが辞めましたっけ。ですが、笹塚様、こやつらがそのことに恨みを抱いて、事を熾すなんぞの肚はありませんや。井尻は、猿江村の田舎医師の代理をやって身を立てており、まずかかわりはないと見ました」

竹蔵は手先を走らせて様子を見させたようだ。

「竹蔵、不知火現伯と堤悠太郎の仲はどうか」

「松倉町界隈じゃあ、悠太郎は不知火先生の金玉を掴んでやがるって評判んでしてねえ。師匠と弟子の間柄を越えた仲という噂です」

「おもしろいな」

と笹塚が顎に手をやって考えこみ、

「もう一人、首が届けられた薬箱持ちはどうだ」

と竹蔵に訊いた。

「へえっ、その善三郎という男は、不知火現伯の五人の弟子の仲では一番の新参、半年前に現伯のもとに弟子入りした者です」

「こやつも上方者か」

「なんでも東海道筋だと患家の者が言っておりやした。弟子らのこと、調べますかい」

「今晩決着がつかねば、調べてもらおうか」

笹塚孫一が、胸の内に採算が立っている風情でそう言った。

「今宵はまず一味の手並みを拝見いたそう」

と応じた笹塚が磐音を見て、

「坂崎どの、そなたの勘でもこの一件、長引くことはあるまいな」

と茶化したように磐音に訊いた。

「はて、さように問われましても探索の知恵はございませぬ」

磐音は真面目に答えを返す。

一座を見回した笹塚がさらに言い、

「どうしてどうして、このお方は、われら以上に嗅覚が鋭い」

「笹塚様がかように早々からお出張りとは、解せませぬ」

と磐音がウビを捻った。

笹塚孫一が、怪しげな金の匂いが漂うところには、必ず姿を見せる。

だが、今回の一件は拐かし事件だ。身代金がいくらであれ、事件が解決すれば、不知火現伯の懐に戻る金だ。むろん、失敗すれば、拐かした一味の懐に入る。

どうみても南町奉行所の知恵者与力がうまい汁を吸える事件とは思えなかった。

「坂崎どの、何事も裏の裏を考えねば、旨味は感じぬでな」

笹塚は平然と吐き捨てた。

時間がじりじりと流れていった。

九つ半を過ぎた頃合い、地蔵の親分の手先が裏口から飛び込んできた。

不知火屋敷に張り付いていた一人だ。

「親分、屋敷が動き出しましたぜ。どうも乗物を用意しているふうだ」

よしよし、と一人悦に入ったのは、大頭の与力だ。

「船かと思うたが、乗物で行くか」

独白する笹塚には、なにか考えがあるらしい。

「一郎太、乗物で行くにしろ、用意した船はあとからついてこさせるがよい」

「はっ」

若い同心が畏まった。

「坂崎、そなた、長崎を知っておったな」

「わずかな期間、滞在しただけにございます」

「長崎の町んは、地役人という地下町人の力が、この江戸では考えも及ばぬくらいに強いと聞いた」

「長崎の町を監督なされたているのは、江戸から派遣された長崎奉行にございますが、長崎の代官とか、町年寄とか申される地役人、土地の方々が仕切っておいでのようでございました」

「聞いた聞いた。南蛮貿易の旨味をたっぷり吸って、下手な大名家より力が強いそうな。中には出来損ないもおる」

「笹塚様にはなんぞ思い描かれたお考えがおありのようですね」

「当たるも八卦あたらぬも八卦」

と笹塚が答えたとき、仕事場から声が次々に上った。

「門が開きました」

「乗物が出て参りました」

「よく聞け」

と笹塚が配下の者たちに声をかけた。

「どんなことが起ころうとも、わしの命なしには動いてはならぬ」

承知したとばかりに、一郎たら同心、地蔵の竹蔵親分と手先らが裏口から出て行った。

しばし間をおくようにして笹塚が立ち上がった。

磐音たちが北割下水に出たとき、提灯の明かりがちらちらと動いて、乗物は横川へと向かっていった。

尾行する一郎太らの影はまったく見えない。

磐音は、二丁の乗物を囲むように美濃部三五郎ら剣客たちが付き従っているのを見た。

北割下水のモヤワれていた舫われていた苫舟に手で合図した笹塚が乗り込み、磐音と柳次郎が続いた。

奉行所の小者が船頭に扮した苫舟は、横川に向かって静かに漕ぎ出された。

月夜の下、提灯を灯していく乗物二丁の追跡だ。間をおいても尾行できた。

横川に出た乗物は、南に方向を転じた。ひたひたと息を潜めて進む一行の緊張が距離をおいても伝わってきた。

船頭は櫓を巧みに使って音がせぬように苫舟を進ませた。

法恩寺橋、長崎橋、北辻橋を越えた。そこで乗物は横川の東に北辻橋で渡った。だが、竪川に架かる新辻橋を渡るとさらに横川に跨る南辻橋を越え、元の横川沿いの西側の河岸道に戻った。

横川と竪川が交差するｔころに三つの橋が架かっていた。

横川には北側と南詰に二つが架かっていた。が、竪川には東側にしか橋がなかった。そこで、横川の西側の道を直進するには、北辻橋で東にいったん渡り、今度は竪川に架かる新辻橋を越え、再び横川の南辻橋を渡って、元の河岸道に戻らねばならなかった。

船頭が櫓を調節して間合いを保った。

笹塚が小さく頷いた。

乗物の一行は、菊川橋、猿江橋を横に見て、小名木川に差し掛かった。だが、ここには直進するための新高橋が架かり、深川扇橋町、海辺町へと渡してくれた。

「平戸藩と長崎会所の相乗りの御雇船が佃島沖に停泊しておる。この船には、海路、海賊に襲われても切り抜けられるように腕利きが乗っておるそうな」

磐音が苫舟に鎮座する笹塚孫一を振り見た。

笹塚の顔も体も闇に沈んでいた。

「今度の一件、肥前平戸藩と長崎会所に関わりがあると申されるので」

「あるならば、町方がのこのこ顔を出せるものか」

磐音は次の言葉を待った。

「雇船とはいえ、松浦党以来の梶の葉の家紋を船旗に掲げた船じゃ。今度の一件から切り離しておこうと思うてな。留守居役どのにお目にかかった」

松浦家六万石に恩を売りにいったのか、と笹塚の目敏さに磐音は感心した。

「さすが笹塚様にございますな」

磐音の嘆声をじろりと見た笹塚が、

「不知火現伯じゃが、長崎留学時代には黒瀬川至庵という名であった」

「どういうことにございますか」

「京の出の至庵は、宝暦八年から十二年にかけて坂崎で蘭方を学んでおる。帰国に際して、長崎から摂津に向かう長崎会所の船に同乗を許されておる。ところが風待ちの博多の湊で至庵の姿が忽然と消えた。積み込まれてあった大量の阿片とともにな」

な、なんと、と柳次郎が呟いた。

「会所の船だ。阿片は長崎奉行に許されて江戸に送られるものだった。だがな、そのほかにも積み込まれてあったのだ。それを至庵はくすねたというわけだ」

「悪賢い野郎だぜ」

再び柳次郎が吐き捨てた。

「長崎会所としても公にはできぬ。だが、そのまま放っておくとメンツが丸つぶれだ。西海道筋から山陽道、至庵の出の京と密かに探索の者を送ったが、行方は杳として知れなかった。一方、至庵は、江戸で名を不知火現伯と変え、徒歩医者を開業した。で、数年後、もはや長崎の追及があるまいと思われた時期に本性を発揮したのだ」

「隠し持った阿片を使い、死にかけた老人の痛みを和らげて、名医の評判をとったのですね」

「そういうことだ。また、松浦家に出入りできたことが黒瀬川至庵改め不知火現伯の出世に拍車をかけた」

「一緒に拐かされた堤悠太郎は、現伯の正体を承知していたのですね」

「悠太郎は、現伯の遠縁の者のようじゃ。推量するに現伯が金を出して長崎に留学をさせた。そして、留学を終えた悠太郎は、現伯同様、阿片と一緒に江戸にやってきて、現伯の片腕になったというわけじゃ」

苫舟に笹塚の淡々とした越えが響いていた。

外は深川も南の外れ、川面に潮の匂いが流れていた。

乗り物は仙台堀沿いに西へと曲がり、進んでいた。

「笹塚様、平戸藩はなぜさようなことを承知でございますか」

「不知火現伯の出世の糸口を与えてくれたのが平戸藩なら、綻びのきっかけを作ったのも平戸藩だ。八ヶ月前、やはり平戸から船が江戸に出てきておった。江戸に到着した御礼言上に主船頭の吉兵衛が松浦様の上屋敷に挨拶に訪れた折り、診察を終えた現伯を遠くから見て、おや、と思ったそうな。吉兵衛は、肥前長崎から平戸と上方、江戸を結ぶ船の長だ。十数年前、長崎会所を虚仮にした黒瀬川至庵の事件を承知していた。そこで江戸にいる間に不知火現伯のこをを調べ上げたというわけだ。確証を掴んだ吉兵衛は九州に戻った。そして長崎会所に告げ知らせた……」

「不知火現伯は、長崎が送った刺客に拐かされておるのですか」

「そういうことだ。長崎会所としては不知火現伯の背後に控える平戸藩に迷惑をかけたくはない。長崎と平戸、肥前領国というだけではない、南蛮貿易を通じて関わりが深い。そこで事情を知らせ、関係を絶つように忠告した。その直後にこの拐かし事件が起こったというわけだ」

「長崎会所は、不知火現伯こと黒瀬川至庵を始末するだけでは気が収まらないおんですか」

「一切の家財を没収して破滅に追い込むつもりだろうよ」

「…………」

「だが、現伯もしたたかな奴だ。脅迫が届き始めたとき、長崎の手が迫ったことをすぐに察した。美濃部三五郎らを雇って自衛に走ったのがその証拠だ。だが、お常の家が襲われた上に人質に取られて自ら拐かされるとは、油断であったな」

美濃部三五郎らに護衛された乗物は、永代寺三十三間堂のかたわらから汐見橋を渡った。

その先は海辺新田、江戸湾が望めるところだ。

笹塚は苫舟を潮見橋の際に着けさせ、降りた。

約束の場所が近いと見たのだろう。

「長崎の仇を江戸で討つ長崎会所の処分、どうなさるおつもりですか」

磐音は笹塚孫一の肚を訊いた。

「平戸藩も長崎会所も巻き込みたくはない。公にせぬことがなによりだがな」

笹塚はできれば事件を闇のままに葬り去りたいのだ。またそのほうが金にもなる。

「私どもは竹村武左衛門を無事に取り戻せればようございます」

「ただ、見逃せぬのは善三郎を殺していることだ」

先を行く乗物のちょうちんが大きくぶれて、海辺新田の一角で止まった。

渺々とした新田の先に江戸の海が望め、沖合いに帆を下ろした千石船が停泊していた。それが平戸藩の雇船かどうか、分からなかった。

それまで気配を見せなかった木下一郎太や地蔵の竹蔵親分たちが、ちょうちんの明かりが止まった辺りを中心に包囲の輪を縮めようとしていた。

「品川さん、騒ぎを起こるようであれば、竹村さんの身柄の確保を專一に動いてください」

「心得ました」

柳次郎が承知した。

海上に櫓の音が響いた。

二隻の船がゆっくりと海辺新田に接近してきた。すると再び乗り物の明かりが揺れて、船が接近する岸に進み始めた。

磐音たちも闇に紛れるように進んだ。

竹村武左衛門は、後手に縛れた手首をそっと動かした。だが、水夫が結んだ縄目は、まったく緩む気配も見せなかった。

不知火現伯の愛妾、お常の家の門で乗り物を降りた現伯が潜り、門を固く閉ざすように武左衛門に命じた。

武左衛門は、妾宅にしては頑丈な両開きの板戸を閉めると閂をかけた。また今宵も玄関脇の小部屋で現伯とお常の睦言を聞かされるのか。げんなりした武左衛門が玄関へと入ろうとすると、用心棒仲間が二人土間に崩れ落ちていた。

武左衛門が混乱する頭で考えようとしたとき、鳩尾を固い棒の先のようなもので鋭く疲れて意識を失った。

目を覚ましたとき、ゆらりゆらりと体がゆれていた。暗い小部屋に仲間の用心棒がいた。

「われらはどうなったな」

喉の渇きを覚えながら、声を絞り出した。

「たれぞに捕縛されて、船に乗せられているようだ」

「どこぞに売られるのか」

「そなたを売っていくらになる」

「それはそうだが」

「薬箱持ちが逃げ出そうとして殺された。こやつら、生半可な者たちではないぞ。言葉も西国訛りでな」

仲間が教えてくれた。

竹村武左衛門の脳裏に家族の顔が浮かんだ。そして、磐音に分の悪い仕事を押し付けた天罰が下ったなと思った。

磐音や柳次郎が武左衛門の危難を知って動いてくれるか。動いてくれまいな、と縄目の我が身を把持した。

昼も夜も区別のつかない小部屋で何日が過ぎたのか、ふいに外に連れ出され、伝馬船二隻に分乗させられた。

別の伝馬船には、現伯とお常、それに堤悠太郎が乗っていた。

現伯は、体を痛みつけられたか、疲弊しきった様子で弱々しい息を漏らしていた。

武左衛門は、右手に江戸の町を、正面に深川本所の影をみた。

越中島の影も、佃島も認めた。すると今向かおうとしているのは、海辺新田辺りか。

伝馬船には、囚われの六人の他、無口な男たちが乗船していた。いや、現伯の船の舳先に立つのは、南蛮の衣を身に纏った女だ。

武左衛門は海辺新田を抜ける道に明かりが揺れて、こちらに接近してくれるのを認めた。

男たちが剽悍に降りた。

手に、武左衛門が見たこともない剣や矛を持っていた。

明かりを棒鼻に灯した乗り物が止まり、船と乗り物の二つの組が十間の間合いで睨み合った。

「五千両、持ってきたな」

女が美濃部三五郎に声をかけた。

「現伯様を始め六人は息災であろうな」

美濃部が確かめた。

「見てみらんね」

女が伝馬船を示した。

「なぜ善三郎を殺したな、脅かしか」

「逃げようとして大暴れしたもんでくさ、は地味でああなってしもうた」

女の声には同情の響きもあった。

「金を見せんね

女の命に美濃部が手下に合図した。

前の乗り物の戸が開けられると千両箱が三つ鎮座しているのが見えた。

それを見た女が仲間に合図した。一人が千両箱を調べ、もう一人が伝馬船から現伯ら人質を降ろそうと動いた。

まず現伯とお常、それに遊太郎が引きずり下ろされた。

武左衛門らはそのままだ。

お常はすねたように地べたにへたり込んだ。

「残りの二千両を見せてもらおうかね」

女の言葉と同時に乗り物からふいに女が転がり出た。

「不知火現伯の他はいらぬ。お常なんて女は海の底にでも叩き込んでおしまい。現伯一人三千両で身柄を引き取ろう！」

乗り物から現れて叫んだのは、現伯の女房のお万だ。

南蛮衣の女が笑い出した。

「黒瀬川至庵も至庵なら、女房も女房、なかなか一筋縄でいかんごとあるばい。五千両と命じたからには、鐚一文まけられんたい」

女はきっぱりと拒んだ。

お万が応じた。

「黒瀬川至庵とはだれのことです」

「そなたの亭主どのたい。長崎に世話になりながら、後足で砂ばかけた男たいね」

「お万」

と現伯は呼びかけると、

「お常とわしをなんとか助けてくれ」

「お常ですって。他所に若い男を囲って逢引きしていることも知らないのかい。呆れたよ」

と言い放ったお万はしばし沈黙した後、

「取引はやめた」

と宣言した。

「もはやうちの人に三千両の値打ちはないよ。美濃部さん、引き上げますよ」

「お万！」

現伯が悲痛な声を上げた。

「お万様、われらの仲間も囚われの身にござる」

美濃部が言った。

「そんなこと知らないね。さあ、帰りますよ」

お万は乗り物を担ぐ男に合図した。

「待たんね」

南蛮衣の女が言うと、

「三千両は長崎のもんたい」

と仲間に合図した。

先ほど千両箱を調べた男が乗り物の前を塞いだ。

「どけ、どきやがれ！」

お万が叫ぶと夜叉のような形相に変身して、男に突っかかっていった。

その手に短刀が閃いていた。

男は油断しなかった。

身を開くと短刀の切っ先を躱し、お万の頬っぺたを叩いた。

お万が横手に吹っ飛ぶように転がった。そして、

わああっ

と泣き出した。

その瞬間、美濃部三五郎が腰を沈めて大刀を抜き撃った。

「あっ！」

背中を割られた長崎の男が転がり、美濃部の配下の剣客が現伯らの下に殺到した。

南蛮衣の女が口笛を吹くと、海からきた男たちが剽悍にも飛び跳ねて動いた。

撓る剣が剣客たちの刀に擦り合わされて飛ばされ、矛の足を撫で斬って倒した。

美濃部三五郎が現伯のもとに走った。

その瞬間、南蛮衣の女が現伯の横手から殺到し、南蛮の短剣を脇腹から刺し貫いた。

「げええっ！」

「黒瀬川至庵、おまえばかりは生かしておけんたい！」

女が叫び、剣を振り翳した美濃部三五郎が女に突進していった。

女は予期していたように振り向くと、現伯を刺し貫いた南蛮の短剣を抜き取りざま、美濃部三五郎の胸を目掛けて擲った。

磐音の目には、美濃部の剣が女の肩口を斬り割ったのと短剣が胸に突き立ったのが同時に映った。

美濃部と女はしばらく固まったようにお互いを支え合って動かなかった。

だが、ゆらりと揺れて二人は左右に別れるように倒れていた。

残った長崎の男たちと美濃部の配下が衝突しようとした瞬間。

「そこまで、そこまでじゃ！」

笹塚孫一の声が海辺新田に響いた。

そのかたわらには坂崎磐音が油断なく控えていた。

「海から参った男たちにもの申す。それがし、肥前平戸藩の意を受けた者。そなたらの目的は、黒瀬川至庵を斃したことで達せられた。これ以上、江戸の地に騒乱をおこすとなれば、それがし、正体を明かさねばならぬ。薬箱持ちの善三郎の死は、なんとかこちらで始末いたす。このまま、海へ引き上げられよ」

海辺新田に南町奉行所の御用提灯が一つ掲げられた。

長崎者たちはそれを見て、倒された女を引きずり、伝馬船に戻った。

柳次郎が伝馬船に走り寄り、船から下ろされる竹村武左衛門の縛めを脇差で切った。

「柳次郎、どうしてここに」

「竹村の旦那、欲をかくとこういう目に遭うのさ」

武左衛門んは硬直したように突っ立っていたが、がくりと肩を落とした」

「すまぬ」

二隻の伝馬船が海へと戻っていった。

「南町奉行所与力笹塚孫一、事件吟味のため、三千両をいたす。異論あればこの場で申せ」

だれも答えない。

さすがに南町奉行所の知恵者はやることに抜かりがないなと、磐音は感心していた。